ソヴィエト生命倫理学の形成と新優生学論 ——ソヴィエト哲学者イワン・フロロフの言動を中心に——

藤 井 陽 一
(福岡女子短期大学非常勤講師)

The Foundation of Soviet Bioethics and Arguments on Neo-Eugenics

FUJII, Youichi
Part-time Lecturer, Fukuoka Women's Junior College

Abstract

This article is devoted to examining the formation of Soviet bioethics since the 1970s by focusing on the activities and viewpoints of Ivan Frolov, who played a prominent role in laying the ground-work for this interdisciplinary study, and who would later become an adviser to the General Secretary of the CPSU in the Gorbachev era. In doing so, this paper aims to demonstrate the differences between the Soviet bioethics and that of the Western school of thought, as well as to identify the shortcomings of Frolov's attempt to establish the field in the USSR.

Soon after Trofim Lysenko's group lost its power in the Soviet academic community in 1964, not only the field of genetics but also eugenics were resurrected with a new look supported by leading-edge molecular biological and genetic engineering; which had hitherto been developed mainly in the West. In 1970, the Soviet journal "Questions of Philosophy" held a round-table discussion chaired by Frolov with the title "Human Genetics, and its Philosophical, Social-Ethical Problems". There an embryologist, a general geneticist, a demographer, as well as an ethicist and philosophers argued over the social-ethical aspects of science, especially in regard to gene manipulation and neo-eugenics. Today this round-table is regarded as the main origin of the Soviet, —and later— Russian bioethics. Since the 1970s, influenced by a global trend towards regulating recombinant DNA experiments, and opposition to human enhancement, Frolov published his works. These introduced the new world currents in genetic engineering and neo-eugenics; criticised human enhancement from the Marxist paradigm of the "new human", whose personality must be developed all-roundly; supported the Western scholars, who were struggling against neo-eugenics; and appealed for the necessity of an international approach to controlling biology and genetics.

At the same time, the Soviet bio-philosopher developed networks of contacts within UNESCO alongside US bioethics institutes, and gave presentations on the socio-ethical

Keywords: Soviet bioethics, neo-eugenics, Ivan Frolov, the national bioethics committee

aspects of genome science for those foreign associates. Since the middle of the 1980s until the 1990s, Frolov made attempts to get Soviet bioethics recognised by his Western counterparts, by forming a panel of experts engaged in bioethics in various areas. As a result, Soviet bioethics, based on talks among biologists, doctors, philosophers, lawyers, in addition to an Orthodox priest, was established at the end of 1980s. In April of 1991, the Soviet national bioethics committee was established in the Soviet Academy of Sciences in the wake of Frolov's appeal to the Presidium. In May, the International Meeting on Bioethics and the Social Consequences of Biomedical Research was held in Moscow under the auspices of UNESCO.

Therefore, it is indeed clear that Frolov contributed to the foundation of bioethics in the Soviet academic community, but he failed in his moral obligation to develop an interest in bioethics amongst the general public, and to involve them in the debate, whereas in the West national debates centring on bioethics had been flourishing since the 1970s. The result of Frolov's ignorance was evident in a 1993 survey, which demonstrated broad support for neo-eugenic treatments by the Russian populace. Now Boris Yudin, Frolov's successor, highlights the importance of familiarising oneself with this theme and inspiring popular debate on the topic through mass media and education.

は じ め に

1960年代以降、欧米では遺伝学と分子生物学の進歩に伴って新優生学が登場し、それに対する応用倫理学⁽¹⁾として生命倫理学が形成され、学术界だけでなく一般社会の中でも命にどう向き合うかについて広く議論され、この学問は市民権を得てきた。旧ソ連でも1970年代から、生物哲学者で、当時『哲学の諸問題』誌編集長であったイワン・フロロフ⁽²⁾ (1929–1999)がこの学問の振興に力を注ぎ、米国の研究所やUNESCOとの連携に奔走し、国内では1991年4月から国家生命倫理委員会(национальный комитет по биоэтике)を組織すべく科学アカデミー幹部会に働きかけて設置の決定を受け、翌月にはモスクワで生命倫理学と生命医科学の社会的結果に関するUNESCO主催の国際会議が開催された。

しかし、1993年4月にロシアの3ヵ所で行われた国際生命倫理調査の結果は国民の大半が新優生学的遺伝子治療⁽³⁾を歓迎していることを明示し、1970年代からソヴィエト学术界で積

⁽¹⁾ 生命倫理学、環境倫理学、経済倫理学、情報倫理学。現代社会が直面する重要かつ緊急の諸問題に倫理的考察が「応用される(applied)倫理学」。

⁽²⁾ ФРОЛОВ, Иван Тимофеевич (1929–99): 1953年モスクワ国立大学哲学部卒業。1956年同大学院を修了。1959年～『哲学の諸問題』誌幹事。1960年ソ連共産党に入党。1963～65年『平和と社会主義の諸問題』誌編集部(本部:ブラハ)幹事。1965～68年ソ連共産党書記補。1966年博士論文「生物学研究の方法論の諸問題」で博士号(哲学)を授与される。1968～77年『哲学の諸問題』誌編集長。1971年～モスクワ大学哲学部教授。1972年科学アカデミー幹部会遺伝学と育種に関する科学会議局員に選出。1976年ソ連科学アカデミー準会員に選出。1977～79年『平和と社会主義の諸問題』誌編集部幹事。1980～99年『哲学辞書』監修者。1986年ソ連共産党中央委員会委員に選出。1986～87年『コムニスト』誌編集長。1987年科学アカデミー正会員に選出、及び、ソ連哲学会会長に選任。1987～89年ミハイル・ゴルバチョフ党書記長のイデオロギー担当補佐官。1988年ソ連共産党第19回全国協議会代議員。1989～90年ソ連共産党中央委員会書記。1989～91年『プラウダ』紙編集長。1989～91年ソ連人民代議員。1990年第28回ソ連共産党大会代議員。1990～91年ソ連共産党中央委員会政治局員、及び、科学・教育機関部長。

⁽³⁾ 外来遺伝子を種々の方法により生体内に導入し、生体細胞内で発現させることにより、遺伝病や癌等を治療する、もしくは治療効果を高めることを目的とした医療技術。

み上げられてきた論考は、欧米とは対照的に、医師から治験を受ける側である国民が不在の議論であったという事実を学術界に突きつけるものとなった。

当事者以外によるソヴィエト生命倫理学史の先行研究として、米国のソヴィエト科学史家のローレン・グレアムとソヴィエト思想史家リチャード・T・ディジョージの著作を挙げることができる⁽⁴⁾。グレアムはこの論稿で遺伝子工学に関する倫理・社会問題に関して、ソヴィエト生命倫理学の出発点と現在ロシアで看做されている『哲学の諸問題』誌での討論会（1970）を起点として、ソ連で1970年代に展開された議論を75年に米国で開催されたアシロマ会議を境として「思弁的段階」と「実践的段階」の2段階に区分し、ニコライ・ドゥビーニンやアレクサンドル・ネイファフ、ヴラディーミル・エンゲリガルトラ、主に生物学者による議論の推移を詳細に分析し、彼等の論説の背景に、生物学に対する政治的統制をもたらしたルイセンコ事件の再来に対する生物学者達の警戒を見ている。他方ディジョージの論稿では、フロロフら、ソヴィエト生命倫理学形成過程において重要な役割を果たした論者達の論点が遺伝子工学や臓器移植等、テーマ毎に整理されているが、前述した1970年の討論会への言及が無く、この分野におけるフロロフの貢献を認めているにもかかわらず、彼の著作の分析は二冊⁽⁵⁾に限られているうえ、彼とUNESCOとの関係に触れていない。また、これらの先行研究刊行後の1991年にソ連では生命倫理学にとって重要な進展があった。他に21世紀の著作では、ウクライナ生命倫理学者によって自国の生命倫理学の前史としてソヴィエト生命倫理学の概史が叙述されており、その中でフロロフによる貢献が軽く言及されている⁽⁶⁾。

従って当論文では、国家生命倫理委員会発足等、ソヴィエト学術界で生命倫理学が広く認知されるまでの経緯を、特に新優生学に関するフロロフの言動を中心に、今世紀の視点から概観することで、ソ連での生命倫理学形成過程を検証して欧米諸国での議論との相違点を提示し、フロロフ主導による生命倫理学形成の限界がどこにあり、それが今どの様に克服されつつあるのかを明らかにすることを目指す。

1. 遺伝学の科学倫理論

この章では、ソ連において生命倫理学が形成され始めた背景をソヴィエト国内と世界に求め、ソヴィエト学術界における新優生学に関する議論を概観することによって、ソヴィエト生命倫理学を規定する要因を検証する。

(1) 世界における新優生学の勃興と生命倫理学の登場

まず、優生学⁽⁷⁾がソ連の百科辞典でどの様に定義、解説されていたかについて、その変遷を追っていきたい。1931年に刊行された『ソヴィエト大百科辞典（БСЭ）第一版』では、優

⁽⁴⁾ Graham Loren R. (1980), “Reasons for Studying Soviet Science”, pp. 205–240 // De George, Richard T. (1990), “Biomedical Ethics”, pp. 195–224.

⁽⁵⁾ Frolov, I.T. (1986), *Homme, Science, Humanisme: Une nouvelle synthèse*, M.: Editions du progrès; (1982) *Global Problems and the Future of Mankind*, M: Progress Publishers.

⁽⁶⁾ Pustovit, Paliei (2014), pp. 1597–1598. Svitlana V. Pustovit : ウクライナ生命倫理学学会会長、シェービク名称国立卒後教育医学アカデミー（НМАПО імені П. Л. Шупика）哲学部教授。2015年10月22–23日にキエフで開催された第7回国際生命倫理シンポジウムを主催した。

⁽⁷⁾ フランシス・ゴルトンによる造語で、彼によって「人間の内在する質を改善するあらゆる影響に対処する科学であり、究極的な利益へと導くもの」と定義されていた。

生学を「人間の性質」を生物学的な方法によって改善しようとする現代のブルジョアの学説」と定義し、西欧諸国の帝国主義の産物であり、ファシズムの学と断言している。1952年に刊行された第二版でも、「資本主義諸国で広く普及している、「人間の性質」を改善しようとする似非科学」と定義している。加えて、20年代におけるソ連優生学の存在を紹介した上で、「しかしながらソ連の科学的な社会は、ソ連人民の利害と敵対する人間憎悪的な優生学の見解のプロパガンダを識別し、これを阻止した。農業科学アカデミーの1948年8月総会⁽⁸⁾では、ヴァイスマン＝モルガンの遺伝学、つまり優生学の科学的な基盤を厳しく批判した」と、優生学とソ連のイデオロギーとの決定的対立を描いている⁽⁹⁾。ところが、物理学者アレクサンドル・プロホロフによって編纂され1972年に刊行された第三版では、従来の全否定的な記述が一切削除され、次の様な客観的な解説へと変わっている。即ち、「人間の遺伝子の健全性とその遺伝的特性の改善策、人類の本性の一層の向上を目指し、人類の進化に積極的に影響を及ぼす、可能な限りの様々な方法、並びに、生れつきの才能の遺伝子の諸条件と諸法則、遺伝性疾患が次世代へと伝達されるのを可能な限り抑制することに関する学説」と定義している。また、初期の優生学者が人道的な目標を設定したにも関わらず、反動的な人々や人種差別論者が優生学を変更させた、として優生学の本来の意義を寧ろ弁護さえしている⁽¹⁰⁾。この様に、第三版と第一、二版との論調の隔絶はやはり、1965年に生じた遺伝学の完全復活と関連が有る様である。そこで次に、実用研究を重視したソ連指導部、及び、1930年代後半の「大粛清」時代に台頭したトロフィム・ルイセンコ派によって弾圧されていたソヴィエト遺伝学がどの様に再興していったのかを見ていくこととする。

遺伝学者達は、1939年3月に開催された第18回党大会以降強化された科学へのイデオロギー支配の結果、ソ連当局とルイセンコ派によって粛清されたり、資金や人員を大幅に削減されたり、公的に非難される等して、独ソ戦が勃発するまで弾圧されていた⁽¹¹⁾。当局は、1949年の原爆実験、及び、1953年の水爆実験の成功に伴い、米国に対抗して原子力の平和利用を国際社会に訴えるようになった。その路線に則り、科学アカデミーは核時代における放射線が生体に及ぼす影響の研究が持つ重要性を認識し、1956年の科学アカデミー幹部会会議で生物物理学研究所への放射線遺伝学研究室設置が決定された。ビキニ事件以降、放射線の生物への影響に関する研究の立ち遅れと放射線生物学の重要性が科学者達によって認識された。ルイセンコ派による様々な妨害があったものの、1957年4月にはエンゲリガルドを所長職務代行として科学アカデミー・放射線・物理学＝科学生物学研究所が設立され、6月には科学アカデミー・シベリア支部の設置が最終決定され、ドゥビーニンがシベリア支部・細胞学＝遺伝学研究所の「所長兼組織者」という役職に任命され、生物学のほぼ全域に亘る研究がなされた⁽¹²⁾。1957年末に南ウラル・チェリャビンスク地区で起こった放射性廃棄物処理場での爆発事故による放射能被害は原子物理学界に衝撃を与え、反遺伝学的立場を取り続けるフルシチョフに対する反

⁽⁸⁾ 1948年に開催された V.I. レーニン名称全連邦農業科学アカデミー・8月総会を指すと思われる。

⁽⁹⁾ Введенский 1952, 372–373.

⁽¹⁰⁾ 根村 1993, ; Бельшицев, Лобашов 1971, 584–585.

⁽¹¹⁾ 藤岡毅「遺伝学研究所はなぜ乗っ取られたか」『科学の参謀本部』Vol. 3, 17–32. 独ソ戦期から1948年夏までの間は、ルイセンコ派の覇権が大きく揺らぎ、遺伝学者側のある程度の復権が認められたことが近年の研究で明らかになってきた。参照：齋藤宏文「ソ連遺伝学をめぐる二つの学派に戦時期が及ぼした影響について」同上 Vol. 1, 「戦時期における農業科学の実情をめぐる考察」同上 Vol. 2.

⁽¹²⁾ 市川 2012, 1–13.

発が強まった⁽¹³⁾。翌年の1月には科学アカデミー幹部会に放射線生物学委員会が設置され、生体と遺伝への核放射線の作用に関する研究が進められることとなった⁽¹⁴⁾。

1960年代初頭、タンパク質を合成する過程でDNAから転写されて合成されるmRNA (messenger RNA: 伝令リボ核酸) が発見され、更にDNA情報とタンパク質構造との関係といった遺伝暗号解読が世界中の注目を浴びると、1962年、ソヴィエト科学アカデミー幹部会会議の結果、常設の分子生物学学術評議会が設置された。1963年に党中央委員会と閣僚会議が承認した指令では、遺伝学と分子生物学が今後成長すべき分野の一つに挙げられた⁽¹⁵⁾。1964年10月にニキータ・フルシチョフ党第一書記が失脚すると、その翌年7月には遺伝学の学術雑誌『遺伝学』が創刊され、トロフィム・ルイセンコが編集長を務めた『農業生物学』誌は廃刊となった。1966年には『遺伝学』の英語版“Soviet Genetics”が創刊され、ドゥビーニンが所長を務める一般遺伝学研究所が設立されると共に、ルイセンコが所長を務めた遺伝学研究所は閉鎖された⁽¹⁶⁾。

ここで、生命倫理学⁽¹⁷⁾ (bioethics) について概説しておきたい。生命倫理学とは、『生命倫理百科辞典』によれば、「学際的状況において様々な倫理的方法論を用いて行う、生命科学と保健医療の道徳的諸次元——道徳的展望、意思決定、行為、政策を含む——に関する体系的な研究」で⁽¹⁸⁾、一般に、米国の生物学者ヴァン・レンセラー・ポッター⁽¹⁹⁾が1970年と71年の著作で用いた造語が広まったと言われている。その背景として、1960年代に英米では生殖技術や遺伝子改変、新優生学、脳の制御、人工生命といった生命科学や医療技術の進歩への警戒心の高まりがあり、1964年には第18回世界医師会総会でヒトを対象とする医学的研究の倫理的原則「ヘルシンキ宣言」が採択された。また1970年代には、米国の神学者ポール・ラムゼーが1970年に生殖技術や遺伝子組換え以降の遺伝学について著書“Fabricated Man” (『操作された人間』) で言及する等⁽²⁰⁾、幾つかの著作が刊行された。

1960年代末以降、生命倫理学発祥の地である米国では、1969年に設立されたヘイスティングス・センター (社会、倫理、生命科学のための研究所)、及び、1971年に設立されたケネディ倫理学研究所 (「人間の生殖及びバイオエシックスの研究の為の研究所」) の生命倫理学センターが中核となって研究を進め、医療における倫理的諸問題が、医師の裁量による独占の体制から、哲学者、倫理学者、宗教学者、法学者らと医師との合議事項へと転換されていった⁽²¹⁾。

⁽¹³⁾ メドヴェージェフ 1980, 90.

⁽¹⁴⁾ 市川 2012, 5.

⁽¹⁵⁾ メドヴェージェフ 1971, 195.

⁽¹⁶⁾ Шестаков 2015, 395–396.

しかし、エピジェネティクス (epigenetics) な特性 (DNA の塩基配列 (A, C, G, T) の変化を伴わずに、染色体における変化によって生じる、安定的に受け継がれ得る表現型) 研究が20世紀末以降進展したことで、育種家イヴァン・ミチューリンとルイセンコによる獲得形質の遺伝説が、2010年代からロシアで再び注目を浴びつつある。参照: Образцов 2013.

⁽¹⁷⁾ Bioethics に「生命倫理」という訳語を当てたのは上智大学の青木清で、1978年、当大学大学院で日本初の生命倫理学の講義が開講した。

⁽¹⁸⁾ 『生命倫理百科事典』2007, xii.

⁽¹⁹⁾ Potter, Van R. (1970), “Bioethics, the Science of Survival”, *Perspective in Biology and Medicine*, Vol. 14, No. 1, pp. 127–153.; (1971), *Bioethics: Bridge to the Future*, Prentice-Hall.

⁽²⁰⁾ Ramsey, Paul (1970), *Fabricated Man: The Ethics of Genetic Control*, London.

⁽²¹⁾ 掛江直子「バイオエシックス」(2010), 『新版増補 生命倫理事典』728–731 頁。

(2) 人間の遺伝学に関する学際的円卓会議とその影響

1969年11月に科学アカデミー幹部会議の場で現代自然科学の哲学的諸問題について審議された際に、科学アカデミー総裁ムスティスラフ・ケルディシュが人間の遺伝学の哲学的・社会学的側面の重要性を指摘したことを受けて、翌年、フロロフが編集長を務める『哲学の諸問題』誌主催による人間の遺伝学に関する学際的円卓会議が開催された。フロロフは1960年代から生物学の方法論に関する研究を重ね、1968年に『遺伝学と弁証法』という単著を刊行していた。全体を通じてこの討論会では多くの出席者が特に優生学に関して自身の見解を述べた。ここでの議論の大半は既にグレアムが詳細に紹介しているので、本稿ではそれ以外の部分を中心に検証する。

出席者の胎生学者ネイファフは、ドナーの細胞核移植によって人工的にドナーと外見のみならず生理的にも心理的にも類似した一卵双生児の創出への期待感を示し、ドナーが偉大な科学者であれば、ある条件下ではその人工的一卵性双生児は多くの同僚よりも科学的成功を収めることができると述べ、その例としてアルベルト・アインシュタインを挙げた⁽²²⁾。哲学者メラブ・ママルダシュヴィリは、この点について、世間は個人の遺伝的潜在能力ではなく、その人の業績を評価して「天才」と呼ぶのだと反論した⁽²³⁾。一般遺伝学研究所長ドゥビーニンは、優生学が勧める所の人間の遺伝形質の再配列という目標を足掛かりにした適切な方法は動物やその他の生物の品種改良において示された手法と全く変わらず、同様な手法を人々に適用することは人々を実験の群れに変えてしまうし、「人間」概念の本質自体、及び、その社会定義の破壊であると懸念を示した。他方で彼は、健全な遺伝子の保持と有害な突然変異の根絶によって遺伝疾患と闘う医学遺伝学と、遺伝子改良による新人類創出を目指す優生学とは区別されるべきであると主張した⁽²⁴⁾。1960年代後半から研究者の倫理に関する著作を出していた倫理学者のアレクサンドル・シシュキンは現代遺伝学の成果を人間に適用する際の倫理的側面に言及し、先天性疾患に対する遺伝子治療の道徳的意義を訴え、知的ないし身体的障害児出生を予防する可能性を開くと述べる一方で、遺伝学的方法によって人類のエンハンスメント⁽²⁵⁾を志向することは有害であるとも述べた⁽²⁶⁾。しかし21世紀の今日では、ドゥビーニンやシシュキンが述べた、遺伝による先天異常の発生子防の様な、遺伝子治療や着床前・出生前診断、遺伝子スクリーニング⁽²⁷⁾等の医療行為は新優生学的医療と看做されており、望ましくないと看做された遺伝子を持つ人が差別を受ける恐れがあること等から、問題視されている⁽²⁸⁾。その他、人口

⁽²²⁾ Лисеев, Шаров, 1970, 107-108.

⁽²³⁾ Лисеев, Шаров, 1970, 130.

⁽²⁴⁾ Лисеев, Шаров, 1970, 108-110.

⁽²⁵⁾ 健康の回復と維持という目的を超えて、能力や性質の「改善」を目指して人間の心身に医学的に介入すること。「増進的介入」や「増強」、「強化」という訳語を充てることもある。参照：松田 2004, 164-176.

米大統領生命倫理評議会報告書では、治療と増強を次の様に区別している。「通常理解では、「治療」とは既知の病気や障害、損傷を持った人の健康や機能を正常な状態に回復させる為の処置としてバイオテクノロジーの力を使うことであり、「増強」とは、これと対照的に、何らかの疾患に対してではなく、「正常」に働いている人間の身体や心理に直接介入してそれらを変化させるという形で、生来の素質や活動能力を強化し向上させる為にバイオテクノロジーを使うことである」。参照：カス 2005, 15. 但し、松田純はこの報告書にはエンハンスメントの考察に不可欠な幾つかの重要論点が欠落していることを指摘している。参照：松田 2007, 「訳者あとがき」171-172.

⁽²⁶⁾ Лисеев, Шаров, 1970, 128-129.

⁽²⁷⁾ 遺伝病スクリーニング（遺伝子診断）：臨床症状及び遺伝学的検査の所見によって遺伝性疾患を特定し、発症可能性等を診断すること。

⁽²⁸⁾ 例えば、米大統領生命倫理評議会報告書では、出生前診断が普及すれば、「親になりたいと思う者」

統計学者のボリス・ウルラニスは男女産み分けの問題について、親の願望に沿った子供の性の選択は自然の神秘への干渉を意味し、その均衡を侵害することになるとして、強く反対する立場を示した⁽²⁹⁾。ここでの議論は今世紀での優生学を巡る議論でも参照され、自国における生命倫理学の出発点と認識されている⁽³⁰⁾。

実際、その後この討論会の参加者の一人であるドゥビーニン⁽³¹⁾は、1971年以降同誌に論文を次々と寄稿し、ソヴィエト生命倫理学での重要な論客となった。爾後、厚生省精神病学研究所のヴラディーミル・エフロイムソンやシシュキン、ネイファフも遺伝子工学の発展がもたらす倫理的諸問題に関して見解を表明し始めた。彼等の議論はグレアムとディジョージが既に詳細に分析しているので⁽³²⁾、本稿ではドゥビーニンが論文「人間の遺伝学の哲学的・社会学的側面」で、レーニンの反映論⁽³²⁾に基づきながら、古今の優生学信奉者達の人間学に欠如している考え、即ち、自分の力で獲得した特徴／個性（свойство）の教育による次世代への社会的継承（наследование）、謂わば、「社会的ラマルク主義」、又は、「社会的獲得形質の遺伝」の意義を叙述したということだけをここで紹介しておく⁽³³⁾。

（3）イワン・フロロフによる新優生学論

1970年代、世界では73年に遺伝子組換技術が確立したことで、変異した癌ウィルスが拡散する懸念から、遺伝子組換研究を一時停止（モラトリアム）する呼びかけがスタンフォード大学の研究者から世界の研究者へとなされた。1975年にカリフォルニア州アシロマで組換DNA実験の安全性を巡る初の国際会議が開催され⁽³⁴⁾、DNA組換生物の実験設備外漏出防止（「生物学的封じ込め」）、及び、外部環境の中で生存不可能な生物の使用（「物理的封じ込め」）を前提に実験再開が提言され、翌年、米国国立衛生研究所は「組換DNA実験ガイドライン」を制定した⁽³⁵⁾。これは生物学研究における自主規制の最初の例として知られている。ソヴィエト科学史家グレアムは、上述したように、このアシロマ会議後のソ連での遺伝子工学に関する議論を「実践的段階」と名付け、この段階では研究政策が差し迫った問題となりつつあると同時に、倫理的・哲学的問題が依然として最も重要度が高いと看做した⁽³⁶⁾。当節では、遺伝子組み換え技術に関する国外での研究者達による自主規制の時流と新優生学の台頭を受けて、フロロフがどのような問題提起をしたのかを検証する。

フロロフは1975年の論文「人間の前途」で、先ず冒頭で、人間の「創造本性」を重視し、科学を悪魔と看做し、現代や未来の人間・人類を悲観視する近年の国外の「人類学ブーム」と、人間の「自然本性」を絶対視し、人間について楽観視する第15回世界哲学会議（1973年にブルガ

へへの隠然たる強制の圧力が強まり、「不適切」なものへの差別が強くなる可能性がある。子宮にいた時に診断可能であった欠陥を持って生まれた子供は、最早「自然のミス」とは看做されず、親の怠慢と看做されるようになるかもしれない」という危惧が示されている。参照：カス 2005, 44.

⁽²⁹⁾ Лисеев, Шаров, 1970, 129.

⁽³⁰⁾ 例えば、Хен Ю. В. (2003), *Евгенический проект: «Pro» и «Contra»*; Лисеев И. К. (2010), «Жизнь отданная осмыслению жизни», под ред. Лекторского В. А., Иван Тимофеевич Фролов, М.: РОССПЭН.

⁽³¹⁾ Graham 1980, 220–231, De George 1990, 220.

⁽³²⁾ 「人間の意識は客観的世界を反映するだけではなく、それを創造しもある」。参照：レーニン 1968, 181.

⁽³³⁾ Дубинин 1971, 57–61.

⁽³⁴⁾ 5人のソヴィエト科学者が生化学者アレクサンドル・パーエフに率いられて参加した。

⁽³⁵⁾ Berg, Baltimore, Brenner, Roblin III, and Singer (1975), pp. 1981–1984.

⁽³⁶⁾ Graham 1980, 214.

リアの都市ヴァルナで開催)の結論とを対置し、後者は人間の展望について一面的で誤っているという認識から、「人間の前途」に関する私見を展開した。彼は、人間の前途という「永遠の」問題解決は哲学単独では不可能であり、新しく、且つ、一層複雑化しつつある現代科学を知る必要があり、「生物学の世紀」である 20 世紀においては人間の生物学が大きな位置を占め、生命科学の社会学化が大きな課題であると主張し、現代社会が抱えている複合的な諸問題に対処する為に従来の哲学の枠を拡大する必要性を訴えた⁽³⁷⁾。彼は、前述したポール・ラムゼーが『操作された人間——遺伝子操作の倫理』で列挙した「遺伝的外科医学」の手法、及び、遺伝的欠陥を持つ人の子孫を減らそうとする「禁絶的 (negative) 優生学」乃至「予防性 (preventive) 優生学」や、望ましい形質を持つ人の数を増やそうとする「増進的 (positive) 優生学」といった用語を紹介し、厳しい倫理的統制下で優生学的手段を許容すべきという著者の主張に賛同している。フロロフはまた、マルクス主義者はヒューマニズムの見地から人間の遺伝子を操作する新優生学に対して闘っている欧米の学界界に対する無条件での支持を呼びかけた。彼は、遺伝子工学⁽³⁸⁾に基づいて「新しい人間」創造を目指す「新優生学」を倫理的虚無主義と弾劾し、人間を純粹に生物学的な存在のレベルにまで単純化させ、社会的諸関係の総体としての自己の社会的本質を剥奪するものであると批判し、それに対し、人格の全面的発達によって「新しい人間」の創造を目指すマルクス主義を対置した⁽³⁹⁾。最後に彼は、当論文の初めに紹介したアルヴィン・トフラーが『未来の衝撃』で描いた、「超産業革命」の結果、常時順応していく人類の未来への対案として、社会的進歩と科学技術の進歩との合一の道のみが社会的・倫理的諸問題を解決できると主張した⁽⁴⁰⁾。

フロロフは、1976 年の論文「遺伝子工学の社会的・倫理的諸問題」では、主に、前述したアシロマ会議を取り上げてその決議文書の内容を紹介し、人間の生物学的認識を調整する国際的な合意システムの必要性を訴えた。同時に彼は、遺伝子工学の展望と共に生じた社会的・倫理的諸問題の解決に当たっては、人間の福利の優位というテーゼを前提とする人道的基礎に立ったものであるべきだと主張した⁽⁴¹⁾。

更に彼は、1980 年の論文「社会に対する科学者の責任：遺伝子工学の社会的・倫理的側面」では、現在、分子生物学はかつて核物理学が原子爆弾製造に際して覗き見た様な淵に立っており、人類にとって潜在的脅威となっているという認識を示すとともに、ヒトの新種繁殖を目的として遺伝子工学が利用される可能性を危惧し、生物学を制御する国際的合意体制、及び、遺伝学に対する社会的統制の必要性を訴えるとともに、社会主義諸国では科学者共同体が「外からの管理」ではなく、科学的目的と社会的目的との調和によって自律的に社会的・倫理的問題を解決することが望ましいという見解を繰り返したが、これはルイセンコ事件の再来を回避する為であろう⁽⁴²⁾。

この様に、フロロフは 1970 年代後半に発表した論文の中で、国外での新優生学の進展とそ

⁽³⁷⁾ Фролов 1975, № 7, 83-86.

⁽³⁸⁾ 遺伝子工学 / 操作：或る遺伝子の DNA を「制限酵素」と呼ばれる酵素を用いて切断し、それを「ベクター」と呼ばれる自己増殖できる DNA 分子に組み込んだもの（「組換え DNA」）をつくり、それを大腸菌等の宿主となる生細胞内に移植して増殖させる技術。

⁽³⁹⁾ Фролов 1975, № 7, 90-95.

⁽⁴⁰⁾ Фролов 1975, № 8, 138.

⁽⁴¹⁾ Фролов 1976, 27-28.

⁽⁴²⁾ Фролов 1980, 83-84.

の危険性、及び、それに対する米国を中心とした国外の賛否両論や動向をソヴィエト学術界に紹介していった。こうした新優生学に関するソヴィエト学術界の言論を概括し、欧米諸国での議論と比較すると、ソヴィエト型生命倫理学を次の様に特徴付けることができる。すなわち、その発想の根底には、主にソヴィエト心理学者セルゲイ・ルビンシュテインの著書『存在と意識』（1957）、及び、第21回党大会（1959）でのニキータ・フルシチョフ党第一書記による人間の個性の全面的発達への言及によって、1950年代末以降ソヴィエト心理学界・教育学界・哲学界で形成されてきた人格論がある。この人格論はその議論の基盤が『存在と意識』によって提供されたことにより、倫理学、及び、意識論と密接不可分であるとともに、第22回党大会（1961）で採択された党の新綱領の指針、すなわち、精神的豊かさ、道徳的誠実さ、肉体的完全さを調和的に兼ね備えた新しい人間を育成するという共産主義社会建設にあたっての課題を念頭に置いたものである。故に、社会環境ではなく遺伝子操作による「新しい人間」創出を目指す新優生学は、ソヴィエト・イデオロギーにとっては新出の敵であり、その敵との闘争の為に西側の反優生学論陣との同盟も歓迎すべきなのであった。

2. ソヴィエト国家生命倫理委員会発足の経緯と活動

本章では、フロロフの国内外の活動や報告、即ち、UNESCOや米国の生命倫理学研究所等との関係を築いていき、シンポジウム等で遺伝子工学の発展に伴って生じる倫理的諸問題に関する自身の見解を表明するという国外活動、及び、国内で生命倫理学に従事している各分野の研究者達を組織し、生命倫理委員会を発足させるという国内活動を概観する。

(1) 国外の生命倫理組織との交流

フロロフと科学倫理の諸問題について頻繁に議論していた分子生物学者エンゲリガルトは1976年8月にパリを訪れた際にUNESCO総本部に、フロロフが生物学、及び、倫理学的諸問題について関心を寄せていることを知らせた。同年10月、UNESCOの国内委員のアレクサンドル・ホロディリンからフロロフへ、UNESCOが現代生物学の倫理的側面に関する科学研究の講習の契約を彼と結ぶ意向であることが伝達された⁽⁴³⁾。2ヶ月後、彼はパリにある総本部で遺伝子工学の倫理的側面に関する専門家報告を行い、翌年10月にマドリッドで開催されたUNESCO主催による遺伝学と倫理学に関するシンポジウムで「人間の為の科学（遺伝子工学の社会的、哲学的、倫理的諸問題）」と題する報告を行った。その後彼は、ソヴィエト科学アカデミー準会員として1971年に始動したUNESCOの政府間共同事業「人間と生物圏（Man and the Biosphere: MAB）」のソヴィエト委員会に入り、シリーズ『人間と生物圏』副編集長として1980年代ナウカ出版局からこのシリーズを刊行し続けた。

1987年からフロロフは、1983年にフランス大統領フランソワ・ミッテランによって設立された、欧州の一国の範囲内では最初の国家的な生命倫理委員会である、生命及び保健衛生の諸科学の為の国家倫理諮問委員会（CCNE）委員長のジャン・ベルナール（Jean Bernard）教授との接触を進め、彼に自身の著書『人間・科学・ヒューマニズム：新しい統合』（仏語訳、1986）を送り、ベルナールはCCNEの会合でこの本について報告した。フロロフは翌年7月には

⁽⁴³⁾ Белкина, Корсаков 2008, 35. 共著者の Галина Леонидовна Белкина はフロロフの妻で哲学者。

UNESCO 総本部で「現代科学の社会・倫理・人文的諸問題」と題する講義を行った⁽⁴⁴⁾。

1989年3月、UNESCOの1990～1995年の中期計画策定の準備段階において、フロロフは外交官アナトリー・アダミシンに、常会での採決で「生物医学的研究における倫理的諸問題」、「科学技術の進歩の人間的方向付け」等といったテーマを企画として提案することを推奨し、彼自身、翌年9月、UNESCO 総本部に出向き、事務局長で生化学者のフェデリコ・マヨール (Federico Mayor) に面会した。マヨールは1978年から同機関の事務局次長、1987年から局長を務め、UNESCO は丁度その頃、彼のもとで生命科学、特にゲノム⁽⁴⁵⁾ 科学の進展がもたらす倫理的・法的・社会的問題に関する活動を始めていたところであった⁽⁴⁶⁾。

1989年4月にケネディ倫理研究所長エドモンド・ペレグリーノ (Edmund D. Pellegrino) と科学史家のピエトロ・コルシ⁽⁴⁷⁾ の招待により、翌年4月に米国で開催された国際シンポジウム「医療倫理における多文化的次元 (Transcultural Dimensions in Medical Ethics)」で「倫理学と優生学」と題する報告を行った。1970年代後半以降、フロロフは物理学者ピョートル・カピッツァ等の影響を受けて環境問題等のグローバル問題に関心を寄せ、1970年代末にはローマ・クラブの通信会員としても研究活動していた為、この報告の中で彼は、人格 (личность) の尊厳という原則の重要性とともに、人類の生き残りの問題に関連させつつ、生命倫理の問題が全地球的性格を持つことに注意を喚起した。同年6月には、今度はヘイスティングス・センターのシセラ・ボク (Sissela Bok) 研究員を、科学史家グレアムの勧めでモスクワに招待し、生命倫理学の分野における協力の展望について語り合った。この様に、フロロフは1970年代後半以降、世界の生命倫理学の中心的組織との学術交流を通じて、自身の見解を西側諸国に発信すると同時に、ソ連と世界の生命倫理学の懸け橋としても奔走した。

1989年6月にはフロロフの論文「科学倫理：その諸問題と研究領域」が米国の隔月誌『医療と哲学ジャーナル』特集号に掲載された。彼はこの論文の中で、科学の評価においては道德的諸原則が不可欠であり、医学は倫理学による導きを必要とする科学の一つであり、そうした倫理的諸原則は社会によって提示され、解釈されるものであると述べた。また彼は、マルクス主義はヒューマンイズムの理念に基づいて科学と倫理との合一を求める、と社会主義諸国における生命倫理学の宣伝も行った⁽⁴⁸⁾。

他方で、1987年、ミハイル・ゴルバチョフ党書記長の補佐官となっていたフロロフは、アレクサンドル・パーエフらソ連の遺伝学者達が、米国で準備中のヒトゲノム計画への参画に対する当局からの開始許可と援助をゴルバチョフに申し出る際に仲介役を果たした。1989年6月にはモスクワでヒトゲノム計画国際会議が開催され、1990年から米ソ等の国々で計画が実施された。この様に、フロロフは遺伝学の発展自体に反対していたのではなく、遺伝子工学の進歩を利用した新優生学に対して一貫して反対の立場を取っていた。

(2) 国内の倫理学組織の結合、活動、及び、議論

1980年代半ば以降、フロロフはソ連の生命倫理学が世界で認知されるように、自国で生命

⁽⁴⁴⁾ Белкина, Корсаков 2008, 37.

⁽⁴⁵⁾ 一定の生物種に固有に備わっている遺伝情報の保持・発言の機能の源となる DNA の全体構造。

⁽⁴⁶⁾ 位田 2004, 180-181.

⁽⁴⁷⁾ コルシ (Pietro Corsi) は当時イタリアの研究財団フィディア (Fidia) の学術顧問を務めていた。

⁽⁴⁸⁾ Frolov 1989, 235-242.

倫理学の問題に関わっている各分野の研究者を研究グループとして組織する為に努力していた⁽⁴⁹⁾。その結果、1980年代末にそれまで殆ど接触が無かった医療倫理学とそれ以外の倫理学とが統合し、生物学者、医師、哲学者、法律家らの対談に基づく生命倫理学が形成され、その後間もなくロシア正教会も同格の参加者としてこれに加わった。1989年、フロロフの発意によって、科学アカデミー全ソ部門間人間科学センター、及び、その中に人間研究所が設置され、隔月誌『人間』(Человек)が創刊され、今も刊行されている。同年5月に哲学研究所で人間研究所初の会合「人間、科学、社会」が開催され、最終日には「科学倫理と生命倫理学」というテーマでフロロフと哲学者ボリス・ユーディン(後に生命倫理学セクター長となる)の共同司会による円卓会議が開催された。1990年、全ソ外科学科学センター主催による座談会「人間：移植と人工臓器」が開催され、医師の他、哲学者、法律家、聖職者が参加し、その内容が雑誌『人間』の生命倫理学特集号(№. 4)に「私の心臓を持って行け。私は死んだ!」(«Возьмите мое сердце. Я умер!»)という題で掲載された。1991年4月、科学アカデミー幹部会と総裁の数学者グーリー・マルチュークへのフロロフの働きかけによって、ソヴィエト国家生命倫理委員会(Советский национальный комитет по биоэтике)が発足し、パーエフとフロロフが共同代表となり、メンバーに生理学者アナトリー・グリゴリエフ、組織学者ニコライ・フルシチョフ、移植科医ヴァレリー・シュマコフ、脳科学者アンドレイ・アニチコフらが入った⁽⁵⁰⁾。翌月に、冒頭で述べた様に、モスクワで「生命倫理学と生物医学の社会的結果」と題する生命倫理学国際会議が人間科学センターとユネスコの人権・平和部の共同主催によって開催された⁽⁵¹⁾。またこの年に、人間研究所がソヴィエト科学アカデミー内で独立した機関として設立された。

こうして、生命倫理という分野がソ連で公式に登場することとなったが、米国の生命倫理学者がこの分野が生まれた初期の頃の論文で自国の生命倫理を伝統的な専門職倫理、哲学的倫理、神学的倫理の寄せ集めと看做したのと同じく⁽⁵²⁾、ソヴィエト生命倫理もその成立の経緯から医療倫理と道徳哲学とを足し合わせた学術的な性格が濃く、フロロフは自身の論文の中で科学者は一般社会や労働者と接触を持つべきだと主張したにも拘らず⁽⁵³⁾、彼等によって一般市民のみならず、党中央委員達にさえ議論への積極的な参加を促すような動きは見られなかった。またソヴィエト思想家ディジョージは、妊娠中絶等に関して新聞の編集部に寄せられる一般市民の声と専門理論誌での議論との乖離を指摘している⁽⁵⁴⁾。

他方西欧では、1970年代半ば以降一般市民の間でも生命倫理問題に関心が集まり、活発に議論が交わされた。例えば、オランダでは1974年には、一人の医師が末期症状の自分の母親の命を母親自身の求めに応じて終わらせた、同国での積極的安楽死の一つの有名な事例が、その後何十年も続くことになる議論の端緒となった⁽⁵⁵⁾。フランスでは1970年代に人工授精が一般化し、82年に初めての「試験管ベビー」が誕生するに至り、人工生殖に対する社会の関心

⁽⁴⁹⁾ フロロフは、1994年10月にモスクワで開かれた科学アカデミー幹部会で、1980年代半ばから学術会議の枠内で研究グループを基盤として委員会と称する組織が設立されたと強調した。Степин 2001, 556.

⁽⁵⁰⁾ Белкина, Корсаков 2008, 39.

⁽⁵¹⁾ UNESCO. (1991), *Human Rights Teaching*, Vol. 7.

⁽⁵²⁾ 生命倫理百科事典翻訳刊行委員会編 I 2007, 281.

⁽⁵³⁾ Фролов 1975, № 8, 136.

⁽⁵⁴⁾ De George 1990, 196.

⁽⁵⁵⁾ 生命倫理百科事典翻訳刊行委員会 2007, 361.

が高まり、活発な議論が展開され始め⁽⁵⁶⁾、前述した生命倫理委員会（NNCE）が設置され、その年の研究を一般公開する為に、倫理年次総会（the Journées Annuelles d'Éthique）と呼ばれる研究と議論の会議を毎年開いている⁽⁵⁷⁾。尤も、カトリックが支配的なイタリアやスペイン等の欧州諸国では、宗教倫理が生命倫理を自分自身の諸規範に適合させながら、自らを生命倫理に重ね合わせる傾向がある為⁽⁵⁸⁾、ヒト胚に対するヴァチカン教理省や教皇庁立生命アカデミー⁽⁵⁹⁾の見解⁽⁶⁰⁾等の様に、一般市民よりも教皇庁によって生命倫理が左右されるきらいがある⁽⁶¹⁾。

ソ連崩壊後の1992年3月15日にソヴィエト国家生命倫理学委員会から改組されたロシア国家生命倫理委員会（PHKB）がロシア科学アカデミー内に発足した。5月には『哲学の諸問題』誌で「生命倫理：諸問題、困難、展望」と題した円卓会議が開催され、哲学者、法律家、及び、医学の様々な分野の研究者が招待されて議論を交わした⁽⁶²⁾。12月には臓器移植に関する法律「О трансплантации органов и (или) тканей человека」が制定された⁽⁶³⁾。またこの年に、ロシアの生命倫理学研究者達と欧州諸国、カナダ、米国、及び、日本の生命倫理学の専門家達との協力関係が始まった⁽⁶⁴⁾。

PHKBの主な活動内容は、1) 科学研究の倫理指針作成、2) 保健医療と生物医学の倫理における法案の提示、3) 生命倫理上の訓練と教育の推進、4) 教科書と方法論的資料の作成、4) マスメディアにおける生命倫理の問題に関する議論の活性化、5) 独立国家共同体諸国及びロシア地域における生命倫理学の促進である。ソ連崩壊に伴い、国家生命倫理委員会はベラルーシやグルジアといった各構成諸国でも発足し、1993年に設置されたUNESCOの国際生命倫理委員会（International Bioethics Committee: IBC）⁽⁶⁵⁾との連携活動を行っている。

しかし、冒頭で紹介した1993年5月にロシアの3つの都市、モスクワ（500）、ペテロザヴォーツク（250）、ウファ（250）で行われた国際生命倫理調査の結果は、以下の通りであった。

- ・ 政府助成による遺伝病の有無を調べる出生前遺伝子スクリーニング支持：92%（日本 76%）
- ・ 回答者の80%が出生前遺伝子スクリーニングを妊娠中に受けたい、あるいは、配偶者に受けさせたい。（日本 57%）
- ・ 87%が先天性異常の4ヵ月の胎児中絶を支持。（日本 51%）

⁽⁵⁶⁾ 中村 1996, <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/law/lex/96-4/nakamura.htm>

⁽⁵⁷⁾ 生命倫理百科事典翻訳刊行委員会 2007, 358；参照：飯田研究室（2003）下, pp. 259-369.

⁽⁵⁸⁾ 同上, 352.

⁽⁵⁹⁾ 教皇ヨハネ・パウロ2世は1994年自発教令「生命の奥義」（Vitaе Mysterium）を発して、自然科学、医学、神学、哲学、法学等、様々な領域の専門家によって構成される生命アカデミーを設立した。参照：秋葉 2005, 4.

⁽⁶⁰⁾ 生命アカデミーによれば、ヒト胚は配偶子の接合以降、単なる細胞の塊ではなく、極めて明確なアイデンティティを有する人の主体である。

⁽⁶¹⁾ 例えば、イタリアの「生殖補助医療に関する法律」（2004年）。参照：秋葉 2005, 151-159.

⁽⁶²⁾ РАН Институт философии 1992, 3-28.

⁽⁶³⁾ この法律はその後2000年、2006年、2007年に改訂された。参照：<http://base.garant.ru/136366/>

⁽⁶⁴⁾ Petrov, Yudin 2010, 18-19.

⁽⁶⁵⁾ IBCの当初の主な事業は「ヒトゲノムと人権の世界宣言」の準備であり、それにより、ヒトゲノムが「人類共通の遺産」であることを明示し、優生学的行為や差別的、好戦的使用を防衛する原則を提示することであった。参照：ジョンセン 2009, 471.

- ・ 4 ヶ月の胎児全体に対しては 43% が中絶を認める。(日本 29%)
- ・ 47% が致命的な遺伝疾患の遺伝子治療の為には個人的に受けたいとし (日本 66%), 19% が治療を希望せず (日本 21%)。
- ・ 59% が、子供がその様な疾患を持っている場合の遺伝子治療に賛成し (日本 74%), 11% が治療を希望せず (日本 11%)。
- ・ 癌等の致命的な疾患の治療法としてヒトの細胞の遺伝的性質の変更に 83% が賛成 (日本 83%), 9% が反対 (日本 14%)。

また、アンケート調査者では、ロシアでは、遺伝子スクリーニングを認めない理由として、優生学に対する不安を挙げた人が一番少なかった⁽⁶⁶⁾。

この結果は 1970 年代からフロロフらが強く反対してきた新優生学的治療を国民の大半が望んでいることを如実に示しており、彼等の見解が全く国民の間に浸透していないことを浮き彫りにした。しかも遺伝子治療に対する肯定的な答えの率は他の先進諸国よりも高い数値を示していた。フロロフは 70 年代以降、新優生学の台頭に危機感を覚えて生命倫理の必要性を認識し、「新しい真のヒューマニズム」に基づいた自説を国内外で発表するとともに、自国での生命倫理学形成の為に奔走してきたが、それは実質的にはこの学問の客体であると同時に主体であるべき一般大衆を軽視した学術界の枠内の活動に限定されていたことを、この調査結果は露呈させたのである。しかしフロロフは、1999 年 1 月にヒトゲノム計画 10 年目に関する会議の場で、自分が組織した委員会が、雨後の筍の様に誕生した多数の生命倫理委員会の中で、自国の民主主義のレベルに応じて中間的レベルにあると自画自賛しこそすれ、上述した調査結果については全く言及しなかった⁽⁶⁷⁾。

生命倫理が漸く一般市民の関心を惹くことができたのは、生物医学研究の倫理的・法的諸問題に関する会議が РНКБ によって開催された 1994 年になってからのことである⁽⁶⁸⁾。その後 1997 年から 98 年にかけて、生命倫理の教科書『ロシアにおける生命倫理：諸価値と規範』⁽⁶⁹⁾や『生命倫理学入門』⁽⁷⁰⁾が出版された。また、モスクワやサンクト・ペテルブルグの大学だけでなく、ヴォルゴグラードといった地方大学でも生命倫理学の講座が開講され⁽⁷¹⁾、この分野における人材育成が進みつつある。加えて、ロシア正教会も 2000 年 8 月にモスクワで開催された全主教会議での採択文書「ロシア正教の社会的概念の基礎」で生命倫理に 1 章 (第 12 章：生命倫理学の諸問題) を当てる等して、この分野における見解を展開させている⁽⁷²⁾。2002 年にはその前年にイタリアで出版されたカトリック生命倫理学の教科書 (『Manuale di Bioetica』) の翻訳書も出版された。更に、その年にはテレビ局 НТВ (エヌ・テー・ヴェー) で生命倫理

⁽⁶⁶⁾ 藤木, メイサー 1994, 116-121, 215-216.

⁽⁶⁷⁾ Степин 2001, 580.

⁽⁶⁸⁾ Petrov, Yudin 2010, 20.

⁽⁶⁹⁾ Силуанова И.В. (1997), Биоэтика в России. Ценности и законы, М.: Грантъ, 1997.

⁽⁷⁰⁾ Ред. О.Ф. Тихомиров, Введение в биоэтику. Учебное пособие, М.: Прогресс-Традиция, 1998.

⁽⁷¹⁾ モスクワ医学アカデミー予防医学学部医学史科生命倫理学講座, モスクワ医科歯科大学哲学・生物医学倫理・人文科学科生命倫理学講座, サンクト・ペテルブルグ国立小児科アカデミー人文科学・生命倫理学講座, ヴォルゴグラード医科大学哲学・生命倫理学・法学科。ヴォルゴグラード医科大学の当学科は生命倫理学の教科書や著書をこれまでに数冊刊行している。参照: <http://www.volgmed.ru/ru/depts/list/16/#publ>

⁽⁷²⁾ Русская православная церковь (2000), Основы социальной концепции русской православной церкви.

に関する対談番組が放映され、フロロフの後継者であるユーディンを中心に徐々に国民向けの生命倫理に関する啓蒙活動が進みつつある。ユーディンは同時に、PHKB 副議長⁽⁷³⁾としてICB、及び、1998年からは欧州評議会生命倫理運営委員会（the Steering Committee on Bioethics: CDBI）との連絡役も果たしている。

この様に、ソヴィエト生命倫理学は1990年代に入ってから漸く、先ず学术界で、然る後委員会として組織的に活動し始めてから、一般社会の中で徐々にではあるが認知されるようになってきた。欧米ではこの学際的学問を手掛けたのは先ずカトリック教会、その後プロテスタント系諸派であったのに対し、ソ連ではその特殊な環境から生命倫理学形成における宗教的色彩は薄かったが、ソ連崩壊後はロシア正教会もローマ・カトリック教会も大衆への各々の生命観の流布を図っている。他方、フロロフの後継者であるユーディンら生命倫理学者達は、国外の研究者達と連携することで自分達の議論の質向上を図るとともに、学術的・世俗的生命倫理を広く市民に浸透させる為に委員会の活動等や大学教育、マス・メディアを通じて一般社会に働きかけている。生命倫理と宗教との関係においては、米国では世俗的生命倫理学と宗教的生命倫理学とが統合されたのに対して、欧州では両者は区別されている⁽⁷⁴⁾。ロシアの生命倫理の実態は、ロシア正教会が円卓会議での討論に参加する一方で、学术界と正教会は個別に各々の生命倫理の規範を市民に浸透させようと努めている点において、その米国と欧州の折衷型と言える。

お わ り に

以上概観してきたように、ソ連では1970年代初頭から、生物哲学者イワン・フロロフが『哲学の諸問題』誌編集長としての職権を利用して、自国での生命倫理学形成を目指した活動を開始し、それによって一般遺伝学研究所長ニコライ・ドゥビーニンら参加者達も遺伝子工学の発展に伴って新しく登場してきた新優生学に関する自己見解を学術雑誌上で展開させるようになった。フロロフは1970年代半ば以降、学術雑誌に寄稿した諸論文の中で、国外の新優生学に関する新動向や思潮を紹介するとともに、それに対する見解も発表してきた。また同時に、国外の生命倫理学に関する組織や研究者達との度重なる接触を通じて自国の生命倫理学の組織作りをも目指した。その結果、1980年代末には様々な分野の研究者の対談形式による生命倫理学を誕生させ、全ソ外科学科学センター主催による座談会、更にはモスクワでUNESCO主催による生命倫理国際会議開催に成功しただけでなく、1991年には国家生命倫理委員会発足にまで漕ぎつけることができた。この実績から、フロロフがソヴィエト学术界に生命倫理学を根付かせた功績は大きいと言えるが、一般市民の中で生命倫理に関する議論が為されてきた欧米と異なって、一般社会への議論の浸透の重要性を軽視したが故に、1993年に行われた国際生命倫理調査では、ロシア国民は他国民よりも新優生学的治療を望む割合が高いという結果が出たことも事実である。1990年代半ば以降、フロロフの活動を引き継いだボリス・ユーディンらは、国際的な生命倫理学界との連携を維持・発展させるとともに、一般市民に生命倫理を浸透させるべく様々な手段を用いて努めてきた。

現在ロシア生命倫理学が取り扱っているテーマは近來のバイオテクノロジーやロボット工

⁽⁷³⁾ PHKB 代表は免疫学研究所研究センター免疫バイオテクノロジー学部長のレム・ペトロフが務めている。

⁽⁷⁴⁾ ジョンセン 2009, 472.

学, ナノテクノロジーの進展や国外の議論に影響を受けている。フランクフルト学派のユルゲン・ハーバーマスが著書『人間本性の未来——リベラルな優生学への途上』(2001)を出版すると、彼の議論を下敷きに、新優生学、乃至「リベラルな」優生学に関する議論が展開された⁽⁷⁵⁾。また、2011年にロシア人企業家ドミトリー・イツコフによって国際企画「2045 イニシアティブ」(Россия 2045)が始動すると、この企画が目指すアバターへの精神転送による不老不死獲得というトランスヒューマニズムの理想を巡って議論が交わされ始めた。この様に、フロロフによってその制度上の基礎が形成されたソヴィエト生命倫理学を継承するロシア生命倫理学は、今なお、ディジョージが1980年代末に指摘した、欧米の議論の後塵を拝するという傾向は残っているものの、21世紀に入ってからには毎年フロロフ記念読書会(Фроловские чтения)が行われ、また2007年には生命倫理学専門理論誌『生命倫理学と人文科学』が創刊される等、この学問は今世紀に入って活発さを増してきており、今後注目に値する研究対象であり続けるであろう。また、本稿ではできなかった新優生学に関するフロロフの著作の十分な検証と欧米諸国の生命倫理学との比較が今後の課題である。

参 考 文 献

(1) 日本語文献

1) 単行本

- 秋葉悦子訳著(2005),『ヴァチカン・アカデミーの生命倫理——ヒト胚の尊厳をめぐる——』知泉書館
 市川浩(2007),『冷戦と科学技術——旧ソ連邦1945-1955年——』ミネルヴァ書房
 市川浩編(2011~2013),『科学の参謀本部——ロシア/ソ連邦/ロシア科学アカデミーの総合的研究——』論集 Vol. 1~3
 カス, レオン・R 編著(倉持武監訳)(2005),『治療を超えて——バイオテクノロジーと幸福の追求』青木書店
 酒井明夫他編(2010),『新版増補 生命倫理事典』太陽出版
 ジョンセン, アルバート・R・(細見博志訳)(2009),『生命倫理学の誕生』勁草書房
 シリーズ生命倫理学編集委員会編(2012),『生命倫理学の基本構図』丸善出版
 シリーズ生命倫理学編集委員会編(2013),『遺伝子と医療』丸善出版
 生命環境倫理ドイツ情報センター編(松田純・小椋宗一郎訳)(2007),『エンハンスメント——バイオテクノロジーによる人間改造と倫理』知泉書館
 生命倫理百科事典翻訳刊行委員会編(2007),『生命倫理百科事典』丸善出版
 千葉大学文学部哲学講座飯田研究室(2003),『独仏生命倫理研究資料集: 独仏を中心としたヨーロッパ生命倫理の全体像の解明とその批判的考察上・下』; 同研究室(2004),『続・独仏生命倫理研究資料集』
 ハーバーマス, ユルゲン(三島健一訳)(2004),『人間の将来とバイオエシックス』法政大学出版局
 藤木典生, メイサー ダリル編(1994),『神経難病, ヒト・ゲノム研究と社会: 第3回国際生命倫理・福井セミナー(1993年11月19-21日)』ユウバイオス倫理研究会
 マルクス, カール/エンゲルス, フリードリッヒ(廣松渉編訳, 小林昌人補訳)(2005),『新編輯版ドイツ・イデオロギー』岩波書店
 メドヴェージェフ, ジョレス(金光不二夫訳)(1971),『ルイセンコ学説の興亡』河出書房新社
 メドヴェージェフ, ジョレス(熊井譲治訳)(1980),『ソ連における科学と政治』みすず書房
 室伏きみ子, 滝澤公子監修(2008),『人類遺伝学用語事典』オーム社
 レーニン, ヴラディミール(マルクス=レーニン主義研究所訳)(1968),「哲学ノート」『レーニン全集』第38巻

⁽⁷⁵⁾ 例えば, Бесялетдинов, Р.Р. (2011), «Концепция совершенствования человека как элемент развития биотехнологий», *Рабочие тетради по биоэтике*, Вып. 12. 彼はこの論文の中で, スポーツの世界におけるドーピングや, 遺伝子操作による身体的能力の向上という倫理的問題に関するアンディ・マイアの著作(Miah, Andy (2004), *Genetically modified athletes: Biomedical ethics, gene doping and sport*, London) も取り上げている。

2) 論文

- 市川浩 (2012), 「ルィセンコ覇権に抗して——ソ連邦科学アカデミー・シベリア支部細胞学＝遺伝学研究所の設立をめぐる——」(広島大学大学院・総合科学研究科紀要 III 『文明科学研究』 Vol. 7. 1-13
- 位田隆一 (2004), 「国際機構による国際生命倫理規範定立とその実効性確保——ユネスコ国際生命倫理委員会の場合——」安藤仁介, 中村道, 位田隆一編 『21 世紀の国際機構: 課題と展望』東信堂
- 木村利人 (2006), 「バイオエシックスと人権に関する世界宣言: UNESCO と生命医科学関連 NGO」日本生命倫理学会編 『生命倫理』第 16 巻第 1 号
- 根村亮 (1993), 「ソ連優生学論争」『現代思想』第 2 号
- 松田純 (2004), 「Enhancement (増進的介入) と「人間の弱さ」の価値」『続・独仏生命倫理研究資料集』上巻
- 丸毛忍 (1965), 「ルィセンコ没落の背景——ソ連生物学論争に関するノート」『月刊共産圏問題』第 7 号

(2) 外国語文献

1) 単行本

- Joravsky, David (1986), *The Lysenko Affair*. University of Chicago Press.
- Ramsey, Paul (1970), *Fabricated Man. The Ethics of Genetic Control*, London.
- Глав. ред. Введенский, Б. А. (1952), Большая советская энциклопедия, 2-е изд. Т. 15. М.: БСЭ.
- ред. Лекторский В.А.(2010), *Иван Тимофеевич Фролов*, М.: РОССПЭН.
- Глав. ред. Прохоров А.М. (1972), *Большая советская энциклопедия*, 3-е изд. Том 6. М.: Советская энциклопедия.
- Соффер, Валерий Н. (2002), Власть и наука : разгром коммунистами генетиков СССР, Изд-во “ЧеРо”.
- Отв. ред. Степин В.С. (2001), *Академик Иван Тимофеевич Фролов. Очерки. Воспоминания. Материалы*. М.: Наука.
- Хен Ю. В. (2003), *Евгенический проект: «Pro» и «Contra»*, М.: ИФ РАН.

2) 論文

- Berg, Paul, David Baltimore, Sydney Brenner, Richard O. Roblin III, and Maxine F. Singer (1975), “Summary Statement of the Asilomar Conference on Recombinant Molecules”, *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, Vol. 72, No. 6, pp. 1981–1984.
- De George, Richard T. (1990), “Biomedical Ethics”, ed. by Graham, Loren R., *Science and the Soviet Social Order*, MA: Harvard University Press.
- Frankel, Charles (1974), “The Specter of Eugenics”, *Commentary*, Vol. 57, No. 3.
- Frolov, Ivan (1977), “Science for Man (Social, Philosophical and Ethical Problems of Genetic Engineering)”, UNESCO, *Symposium on Genetics and Ethics: Problems and Positive Results of Scientific Research in Genetics*, SC-77/Conf.805/9, Paris.
- Frolov, Ivan (1989), “The Ethics of Science: Its Problems and the Sphere of Research”, *The Journal of medicine and philosophy*, Vol. 14, Issue 3.
- Graham, Loren R. (1980), “Reasons for Studying Soviet Science: The Example of Genetic Engineering”, *The Social Context of Soviet Science*, ed. by Lubrano, Linda L., Solomon, Susan Gross.
- Kaushik Vijay, Yudin Boris (1997), “Gene Therapy and the Human Genome Project in Russia”, *Eubios Journal of Asian and International Bioethics*, No. 7.
- Petrov, Rem, Yudin, Boris (2010), “The development of bioethics in Russia”, *National Bioethics Committees in Action*, UNESCO, Paris.
- Pustovit, Svitlana, Lyudmyla Palilei (2014), “Ukraine”, Ed. by Henk A. M. J. ten Have, Bert Gordijn, *Handbook of Global Bioethics*, Vol. 4, Springer, New York.
- Бельшищев Ю.Е., Лобашов М.Е. (1971), «Евгеника». Глав. ред. Прохоров А.М., *Большая советская энциклопедия*, 3-е изд. Том 6.
- Дубинин Н.П. (1971), «Философские и социологические аспекты генетики человека», *Вопросы философии*, № 2.
- Корсаков С.Н. (2008), «И.Т.Фролов и становление отечественной биоэтики», *Биоэтика и гуманитарная экспертиза*. Выпуск 2.
- Белкина Г.Л., Корсаков С.Н. (2008), «И.Т. Фролов и становление отечественной биоэтики», *Биоэтика и гуманитарная экспертиза*. Вып. 2, М.: ИФРАН.
- Белкина Г.Л., Корсаков С.Н. (2009), «И.Т.Фролов о философских основаниях гуманитарной экспертизы», *Биоэтика и гуманитарная экспертиза*. Выпуск 3.
- Белялетдинов Р.Р. (2011), «Концепция совершенствования человека как элемент развития биотехнологий», *Рабочие тетради по биоэтике*, Вып. 12.

- Дубинин Н.П. (1971), «Философские и социологические аспекты генетики человека», *Вопросы философии*, № 2.
- Захаров И.К., Шумный В.К. (2003), «К 15-летию совещания «О состоянии и перспективах развития генетики в СССР»», *Вестник ВОГиС*, № 26.
- Лазар Михайл Гаврилович (2010), «К истории развития этики науки в СССР – России», *Социология науки и технологий*, Т. 1, №. 1.
- Лисеев И.К., Шаров А.Я. (1970), «Генетика человека, ее философские и социально-этические проблемы» (Круглый стол «Вопросов философии»), *Вопросы философии*, №№ 7, 8.
- Михайлова Е.А. (2011), «Нанотехнологии: надо ли говорить о рисках», *Рабочие тетради по биоэтике*, Выпуск 12.
- Петров Р.В., Юдин Б.Г. (2008), «Развитие биоэтики в России», *Казанский медицинский журнал*, Т. 89, №. 4.
- Фролов И.Т. (1975), «Перспективы человека», *Вопросы философии*, №№ 7, 8.
- Фролов И.Т. (1976), «Социально-этические проблемы генетической инженерии», *Природа*, № 1.
- Фролов И.Т. (1980), «Ответственность ученого перед обществом: социально-этические аспекты геной инженерии», № 4.
- Шестаков С.В. (2015), «К 50-летию журнала “Генетика”», *Генетика*, Т. 51, №. 4.

3) インターネット情報

- 中村義孝編 (1996), 「フランスにおける生命倫理立法と憲法院」『立命館法学』(284号) <http://www.ritsumeikai.ac.jp/acd/cg/law/lex/96-4/nakamura.htm> (2016-2-17)
- Закон РФ от 22 декабря 1992 г. N 4180-I “О трансплантации органов и (или) тканей человека” (с изменениями и дополнениями), <http://base.garant.ru/136366/> (2015-12-13)
- Кафедра философии, биоэтики и права, <http://www.volgmed.ru/ru/depts/list/16/#publ> (2015-12-13)
- Образцов Петр (1 апреля 2013 г.), «Чтение второго кода», *Русский журнал*, <http://russ.ru/layout/set/print/pole/CHtenie-vtorogo-koda> (2015-3-30)
- Юбилейный архиерейский собор русской православной церкви (2000), *Основы социальной концепции русской православной церкви*, <http://www.wco.ru/biblio/books/koncept1/Main.htm> (2015-5-6)

(付記) 本稿は西南学院大学の 2015 年度研究インキュベートプログラムに基づく助成を受けたものである。

(本論文は、複数のレフェリーによる審査を経て編集委員会が採択した。)